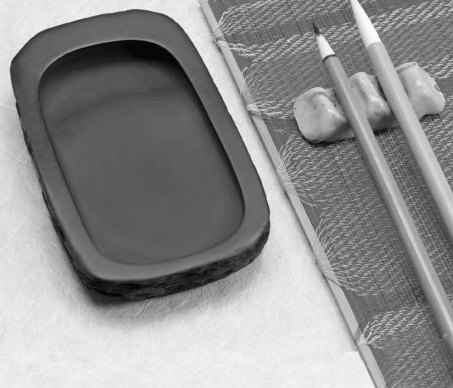


# 化学教育 徒然草



## 理科好き？化学好き？

MIYOSHI Norikazu

三好徳和

徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻 教授  
化学グランプリ・オリンピック委員会 委員長



巻頭言

理科教育における「753問題」。皆さんもご存じのように、小学校では7割の児童が理科好きなのに、中学校では5割、高等学校では3割の生徒しか理科好きではない現状のことである。このことが知られてからかなりの年月が経ったが、変化はないようだ。一方、私が化学グランプリ・オリンピック事業に携わるようになって、早15年が経とうとしている。また徳島大学にて高大連携事業も長年行っており、併せて年間数100人を超える生徒と接しているが、元々理科好きの生徒を相手にしているため753問題の実感がない。しかしどうにかすべき問題である。

理科嫌いの理由の一つに高校生がある意味、最終的に直面する大学入試問題も挙げられよう。ある評論家が現状の大学入試を「時代遅れの公平・公正を期すための認知主義的テスト」と評していた。確かに幾度となく指導要領が改訂されているが、大学入試センター（共通）テストは今も昔も問題は変わっていないようである。ただ、少なくとも化学においては出せるところが非常に限られているにも関わらず、良く問題を作成できるものだと感心している。

さて本巻頭言を書くに当たり、「753問題」を再度検索したところ、別の「教育753」なるものがヒットした。授業を理解するのに何らかの問題を持った児童が小学校では早3割おり、中学校では半数になり、高等学校では実に7割の生徒が何らかの問題を持っていると言うのである。これが本当なら、論理的思考に若干の齟齬があるだけで問題を解くことのできない理科が嫌いになるのも頷ける。ましてや「化学は暗記」と言われていればダブルパンチである。

「化学」は物質を扱う学問であり、この世の中から物質が必要とされなくなることは先ずない。その意味からも「化学」は「セントラルサイエンス」であり、製造業において中心的位置を占めていることに異論はなかろう。今までの施策は、それはそれとして、少なくとも「化学」において、理科好き、化学好きではなくとも「化学の応援団」を増やすための工夫を、今一度根本的に考え直してみてもと考えるのは、定年間近の老人の戯言であろうか？

[連絡先]

770-8506 徳島県徳島市南常三島2-1 (勤務先)